

## あとがき

この本は何よりも、これから働くことになる人達に、辛さと魅力が相半ばする労働と、労働法による規整がどこまで及び、どこに限界があるか、その現実的姿を伝え、出来れば疑似体験してもらいたいとの強い気持ちのもとに編集している。真理さんと勉君は、おそらく読者と同様に、学生時代から卒業してからの就職に不安を感じ、給料日にはアルバイトではじめて給与を手にしたときを思い出して感慨にふける。職場と労働の世界を、最初は珍しいものを見るように、しかしやがては、そのなかで暮らす一員としての自覚が芽生えて、何を我慢しなければならぬか、しかし納得できないことには声をあげる必要性も感じるようになる。労働法を学ぶ必要性を痛感するのはそのときかも知れないし、学生時代からもっと関心をもてばよかったと後悔する人も少なくないはずだ。読者にも、この真理さんと勉君の成長を見守ると同時に、読み進むうちに、一緒に成長するような実感をもってもらえたら有り難いと思っている。

労働者にとつての新しい世紀の幕開けは、希望に満ちたというより、厳しい環境変化のなかで始まった。これまでの環境が労働者にとつて恵まれ過ぎていたわけではないことも、本書に目を通してもらえば明らかだが、労働法や社会保障法の過剰な規制と保護を見直し、企業活動をもっと自由に行えるように、労働者にも競争と効率、自己責任を求める方向へ大きく舵を切った方向転換が、これまでになかった新たな問題を発生させているからだ。

しかし、何が起きているかを理解するにも一筋縄ではいかなぬものだ。一方では、労働法による保護が企業の自由な活動を妨げているとして、規制を廃止あるいは緩和する方向が進められている。グローバルな競争に勝ち抜くために、人件費コストの節

約をめざした非正規雇用の拡大や、解雇をもっと自由にしてもらいたい、労働者をもっと自由に働かせたいといった、これまで築かれてきた労働法の「解体」を迫る動きが、とりわけ、派遣労働を一時的業務から継続的業務に活用できるようにする派遣法改正や、労働時間法の規制の解除などを中心に攻防は微妙な最終段階に入っている。そのため、明らかになっている改正案の概略を該当する箇所を取り上げ、近い将来実現してもわかるようにした。

他方、従来の労働法を空洞化させる動きは、労働の世界の大きな変化によってもたらされたものでもある。たとえば、パート労働の広がりには、子育てや介護といった家庭生活と両立をはかりたい切実な想いが込められているが、これまでの日本の雇用慣行は、むしろそれを切り捨てることで成り立っていた。均等待遇の原則やセーフティネットを整えることができれば、家庭生活や個人の柔軟な生き方・働き方との両立を可能にし、ワーク・シェアリングの手段として活用できることもオランダモデルで示されている。

悲観ばかりしている必要はない。重要なのは初心に戻って、働き方の現在とこれから、それに対する労働法の可能性を探ることだ。本書の題名を「解体新書」としたのも、決して奇をてらったからではなく、私たち自身がもう一度、労働法と労働の現実を擦りあわせることから出発してみようと考えたからだ。そのため本書は、「シゴトはキミの顔」に始まり、「心臓」にあたる働くルールと賃金・労働時間から、「手」をつなぐ団結のあり方へ、そしてトラブルには勇気をだして「足でキックを」といった順番で、労働法の全体を診断する構成を採用している。一見奇想天外に見えて、本当は真面目な本書に込めた私たちの思いを、読者の皆さんに理解していただけたらと切に願っている。

二〇一五年二月

編者記す